HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道のロシア人
Author(s)	森永, 貴子; クズネツォフ, S.I.
Description	森永貴子(訳)
Citation	北方人文研究, 1, 1-18
Issue Date	2008-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34537
Type	departmental bulletin paper
File Information	KUZNETSV.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道のロシア人

著：S. I. クズネツォフ
ロシア国立イルクーツク大学教授、北海道大学客員教授
訳：森　永　貴　子
北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター

序

日本の近代化は 19 世紀半ばに始まり、この時まで将軍の命令により外部世界から閉ざされていた日本は外国人―すなわちアメリカ人、ヨーロッパ人、ロシア人に対して「開かれ」た。ロシアにとって特別な意味を持ったのは、地理的に最も近い日本列島北部の島、北海道〔ママ、訳註 1〕だった。この時代、北海道の最重要港は箱館だった。

箱館は北海道最古の町の一つであり、15 世紀にはすでに要塞が建設されていた。1454 年、青森からやって来た武士、河野政通は宇須岸に自分の館を建てた。これが直角形をしていたので、ハコ（箱）と名づけられた。そこからこの建物にちなみ、箱館―箱の館という名が膾炙した。

江戸時代（1600-1868 年）、箱館は活発な海産物取引を行い、繁栄する港であった。ここで特別な役割を果たしたのは、多数の商船を抱え、箱館最初の商館主だった高田屋嘉兵衛である。1799 年、彼は南サハリンへの航路を開く。

1802 年、幕府は北海道〔ママ〕の政治・経済・軍事を司るため、ここに奉行を置いた。

日本近代化の夜明けである 1859 年、箱館は初めて国際貿易に開かれた国内三港の一つとなった。横浜が北米に視線を向け、長崎が南方を見ていたとすると、箱館は北方のロシアに開かれた窓口であった。

北海道に現われた最初のロシア船

日本で最初のロシア使節が成功したとは言いがたいだろう。1792 年 9 月 13 日〔訳註 2〕、ロシアのガレオン船「エカテリーナ号」は蝦夷ヶ島（北海道）の根室湾に錨を下ろした。地元当局はロシアの使節たちをすぐには受け入れなかった。アダム・ラクスマンは島の当局に手紙を送った。交渉が行われたが、手紙の返事は長いこと待たされた。1793 年 6 月、航海士ロフツォフが指揮する「エカテリーナ号」は箱館港に行くことを許可され、その上ロシア船は日本船に護送されて航行した。交渉は 10 日間にわたり、何ら成果はなかった。日本との通商関係樹立は成功しなかった。8 月 11 日、ガレオン船「エカテリーナ号」は箱館を去り、ロシアに針路を取った。日出づる国を訪れたロシア最初の探検隊は、日本の当局から贈り物を持ち帰った。箱に収められた刀三振り、葉煙草 20 箱、米

100クール〔訳注3〕、和紙数箱、陶製の茶器、そしてもしロシアが日本と交渉を続けたい場合にロシア船が長崎に来ることを許可する信牌であった。

日本が「開国」し、米・英・仏・露と条約が締結された後、箱館は食料・水・燃料物資を補給するために外国船が立ち寄る町の仲間入りをした。箱館が外国人に完全に開かれたのは1859年6月2日〔訳注4〕である。

1855年2月7日〔訳注4〕に締結された日露和親条約により、ロシア船は箱館、下田、長崎に寄港することを許可された。「これら三港で、今後ロシア船は損傷を修理すること、薪水・食料・その他必需品、もし可能であれば石炭も積み込んで、その代価を金・銀貨幣で支払うこと、金銭が不足した時には積荷商品で代替することができる[1]」条約の第三条はこのように述べている。同条約により、ロシア政府は最初の二港のうちの一港に領事を任命した。当時のロシア政府はその必要性を認識していた。「領事館の場所・建物は日本政府が決定し、ロシア人は自分たちの慣習・法律に則って同所に居住すること」[2]

正式な関係の始まりと箱館の役割

1855年下田条約後まもなく、1858年日露修好通商条約が締結された。これは8月7日(19日)〔訳注5〕に江戸で締結された。ロシア側はプチャーチン、日本側は永井玄蕃頭、井上信濃守らであった。第一条は1855年の条約を温存し、日露間に正式な外交関係を樹立した。両国は正規の外交代理を交換することが条件づけられた（第二条)。「今後ロシア皇帝陛下は、日本の大君への外交代理を任命する権利を有する。外交代理は大使、公使、もしくは代理公使の称号がありうる」[3] 1859-1863年、ロシア人には箱館、長崎の他に、下田に代わってさらに三港が開港された。開港された港全てに正規の領事館が設置された。ロシア人たちは商取引を目的に江戸、大阪を自由に訪れること、開港された港に居住することを許可された。両国国民には、他の外国人に与えられる全ての権利・特典が適用された。第二条に基づき、日本には正規のロシア公使館が置かれた。第四条によると、ロシア政府は「日本でロシア貿易のために開港されている港の全て、もしくはそのうちのいくつかに、領事もしくは領事代理を置くことができる」[4] 条約に従い、ロシア人は箱館から1里の範囲内を自由に移動することができた（1里は約4 km)。

外国人が植民地化の目論見を抱いて日本に浸透することを懸念すると同時に、最も進歩的な人々の中で広い世界を知りたいという渇望がわき起こり、外国人と接触しようとする志向が強まった。思慮深い日本人たちは、独立の維持は、西側の成果を修得し、自分たちの後進性を一掃できた時に初めて可能だということを理解していた。

箱館に立ち寄る外国船は一般に何を求めたのだろうか？　まず燃料、食料、水である。いくらで

1）Гримм Э. Д. *Сборник договоров и других документов по истории международных отношений на Дальнем Востоке (1842-1925).* — М.: Изд. Ин－та востоковедния, 1927. С. 52-53.

2）Там же. — С. 53.

3）*Договоры России с Востоком политические и торговые.* Составил и издал Т. Юзефович. — СПб., 1869. — С. 280.

4）Там же.

もある淡水以外、ここでは何も十分に得ることはできなかった。そのため幕府は箱館に燃料、食料、飲料を運ばざるをえなかった。外国船は牛肉を求めたが、その生産は北海道で始まったばかりだった。畜産のため、岩手藩から家畜が運ばれ、その繁殖が奨励された。幕府はまた、北海道の農民が野菜と、とりわけ馬鈴薯を栽培するのを奨励しようとし、外国人に供給するための穀物を入手した。外国船に燃料を供給し始めたのは、つい最近沿岸部に開かれたばかりの白糠、茅沼炭坑だった。このように、箱館に多数の外国人が現れたことが、この町と郊外の急速な経済発展の理由の一つだった。他方、外国人自身も北海道の開拓に積極的に参加した。例えば、箱館から日本の他の地域に流通していた海産物の取引が、海外に対しては外国人の手に集中した。さらに、このビジネスに日本人が積極的に参加した。外国人の申し出と参加により、箱館は急速に貿易港へと変貌した。北海道の経済的発展で大きな地位を占めているのが J. ライスであり、彼は日本人に最先端の畜産方法を教え、日本人にそれまで知られていなかった多くの作物を栽培した[5)]。

歴史的には、北海道開拓に最も積極的に参加したのはアメリカ人となった。このため、日本北部における農業の発展は H. ケプロン、T. ブレキストンと、そして専門教育では W. クラークの名と強く結びついている。箱館に住み着いた最初の外国人の一人がアメリカ人商人ジョージ・ライスであり、1857 年に同所へやって来た。ロシアがどんなに望んでも、これに反対することはできなかった。日本と発展したヨーロッパ・ロシア地区との間には、広大かつ開発の遅れたシベリア・極東が横たわり、確実な交通機関はなかった。日露貿易を急速に発展させたいというロシア商人の希望は全く経済的裏付けがなかった。両国とも、パートナーの関心を引きつけるような商品を提示することができなかった。日本人はロシアの毛皮を必要としなかったし、ロシアでは米も、何か他の日本商品も特に必要ではなかった。にもかかわらず関係は発展し、ロシア人外交官、学者、聖職者たちもまた北海道の歴史の中に記述されたのである。

函館のロシア領事館

彼らの中で重要な位置を占めているのは、日本で最初のロシア人領事 I. A. ゴシケーヴィチである。よく知られているように、日本で最初のロシア領事館は 1858 年、北海道の箱館に開かれた（正式に任命された初代ロシア領事は I. A. ゴシケーヴィチである）。10 年後、領事館は総領事館に改変され（3 年間）、1868 年に東京と改称された江戸にロシア公使館が置かれる 1874 年まで、箱館領事館は事実上ロシア大使館としての機能を果たした。I. A. ゴシケーヴィチは教養深い知識人であり、日本におけるロシアの利益を十分に代表し、ここでロシアに関する知識を広め、日本に関する実に様々な情報を収集した。彼は箱館に家族と数人の領事館職員、医者、司祭を伴って来訪し、事実上、北海道における初の正式な外国主権の代弁者となった。後に、1859 年秋、箱館に現れたのはイギリス領事 S. バートン・ホジソン、フランスのカトリック宣教師メルメ・ド・カシヨンであった。彼らはみな家を借り、それらを住居や宗教施設に用いた。彼らは主に港湾地区に住んだ。箱館は小さかったので人口も少なく、外国人はすぐに町で目立つ人々となった。

1860 年、著名なロシア提督 I. F. リハチョフは、ロシアが箱館の地理的立地を利用することが重要

5）*Foreign Pioneers. A Short History of the Contribution of Foreigners to Development of Hokkaido*. - Sapporo: Hokkaido Prefectural Government, 1968. — P. 147.

だと指摘した。箱館は対馬、アニワ湾と並び、「我が国の内海への扉と名づけられるだろう」[6]と。箱館における主導権はすでにイギリス人とアメリカ人に握られていることを理解しつつも、彼はロシアが対馬もしくはその一部を獲得するよう提案し[7]、ゴシケーヴィチ領事がそれにあまり積極的でないのを嘆いた。

ロシア領事とその協力者たちは1858年11月5日〔訳注6〕に箱館に到着した。クリッパー船「ジギット号」に与えられた最初の定員は15人だった。その中には領事秘書官V. D. アヴァンデル、航海技師P. N. ナジーモフ、医師P. N. アルブレヒト、司祭V. K. マホフが含まれていた。パーヴェル・ナジーモフは1858年12月1日(13日)〔訳注7〕の手紙で、彼らが箱館港で出迎えられた時の様子を伝えている。「日本の役人たちは挨拶のためすぐにクリッパーに現れた。彼らのうち最初に甲板に上がってきた人物が英語で我々に挨拶した。それから通訳がいて、彼の後に藩の上級役人、スパイである士官、税関検査官が続いた」[8]この日、地元行政官への表敬訪問が行われた。「招待を受け、領事と領事館職員、仕事の忙しくないロシア船艦長・士官たちが正装で岸に向かうと、そこには好奇心で一杯の群衆が待ち受けていた……。知事〔ママ、訳注8〕は我々に町の法規と停泊規定を宣告し、クリッパー船の職員が許可なく上陸しないよう命じた。しかしそんなことは受け入れられず、日本人たちは驚いた様子で、服従に対する拒絶の言葉を聞いていた。……知事〔ママ〕は役人2名に、指定された寺を案内するよう命じた。領事と医師、家族は一時的に寺の二部屋に落ち着いた。秘書官と私は寺に居場所がなく、クリッパー船に残った」[9]

箱館に滞在した7年間に、ゴシケーヴィチは非常に多くの仕事を行った。領事館が建設され[10]、医師ゼレンスキーの支援で、ロシア人のための海軍病院が開かれ、日本人もそこで治療された。領事館最初の仕事の一つは、小病院の建設だった。最初の頃、医師たち（そこではアルブレヒトの後任としてゼレンスキーとマトヴェーエフが働いた）は自分たちのコロニーと箱館に立ち寄るロシア人水夫のみを治療していた。日本人の治療には政府の特別許可が必要だった。江戸からの許可を得る際には、治療を渇望する人々が列をなすほどになった。しかも治療と薬は無料だった。特にしばしば医師たちはかいせん〔訳注9〕、梅毒、眼病と格闘した。患者は通常重体かつ放置された状態で運び込まれ、地元の医者も匙を投げているような段階にあった。アルブレヒトは「確固たる威信」を獲得し、浮腫に苦しむ患者2名を治療した。彼の所にやって来た訪問者の列が病院の門前に陣取った。アルブレヒトの所には地元の医者が「毎日訪れ」、知的好奇心から彼の治療を観察した。当時の

6）*Морской сборник.* — 1912. — № 11. — С. 17.
7）Там же. — С. 19.
8）*Морской сборник.* — 1859. — Том XLI. — № 5. — С. 53.
9）Там же. — С. 55–56.
10）1861年上汐見地区(現在のヴォスクレセニエ教会の隣)には、ロシア領事館建設のために7.5ヘクタールの土地が分譲された。翌年春に、建物は準備が整い、領事館は実行寺・高龍寺の仮住まいから移った。しかし1865年近くのイギリス領事館から火事が起こり、そのためロシア領事館はほぼ全焼した。その後建設は長い間始まらなかった。領事館は町の建物を借りたが、ロシア水域における漁業権が開かれると、領事館の必要性の高まりが認識された。1902年にロシア政府は土地区画を購入し、翌年から新館の建設が始まった。日露戦争の時期に建設は中断されたが、1906年12月には建物が完成した。建物の設計は日本で働いていたドイツ人建築家ゼルが行った。レンガ造りの2階建ての母屋には、入り口に和式の庇が取り付けられ、当時の建築としては珍しかった。革命後、領事館はソビエト領事館となり、1944年10月1日に閉鎖された。1965年から1996年まで建物には児童・青年向けの学習センターがあったが、現在建物は外観を見ることだけが許されている。

日本人の医療技術は伝統的なものだった。鍼治療が実践され、乾燥した藻草が用いられた。藻草は火をつけ、体の決まったツボに置いた。マッサージが広く行われ、その専門技術を身につけていたのは盲者であった。彼らは村々を回り、笛を吹いて自分の来訪を知らせた。日本人が解剖学を知ったのは長崎出島のオランダ人医師からだった。しかし外科はまだ普及していなかった。アルブレヒト医師は知事〔ママ〕の了解を得て、日本人医師のために死体の標本作りを公開した〔訳註 10〕。彼自身は、日本人医師の豊富な植物薬理学に興味を持って観察し、それぞれの薬草が医学的用途を持つことに注目した。1862 年、ロシア人医師たちは外来患者用の治療を行っただけではなく、年間 100 人ほどの患者を入院させた。この病院の開業には多くの困難が伴った。地元当局は外国人医師の開業を嫌々許可した。もっと複雑だったのは病院建設用の土地分譲問題を解決することだった。病院建設までの長い間、アルブレヒトは自宅で診察を行っていたので、家は住居というより病院に近かった。このように、当局は日本人と外国人の接触を制限しようとした。箱館のロシア病院は 1866 年まで存続し、日本人 1000 人に無料で医療援助を行った。いかなる時もロシア病院は北海道の国内医療発展と、最新治療法の日本人医師への普及を促した[11]。アルブレヒトは地元当局に対し、市街の不衛生な状態を指摘した。彼はこう書いている。「箱館は、人々がその清潔さについて書いているにもかかわらず、疑いなく日本で最も汚い町の一つだ。１年のうち４ヶ月、秋の２ヶ月と春の２ヶ月、箱館の通りはぬかるみの海になり、ヨーロッパ人の靴では歩けない」

「環境のせいで町の悪臭が酷くなり、通りや建物の周囲にむき出しとなっている水路を通じて拡散する。日本人は家屋内部を清潔に維持しているが、周囲の泥には配慮しないらしい。アルブレヒトとゴシケーヴィチは地元役人を説得し、西洋の医学知識が普及するよりもはるか前の時代の日本で公衆衛生に協力するため、何らかの方法に着手しようとしたが、無駄だった」[12]

ロシア領事は日本人にロシアの慣習・伝統を教えようと努力している。「地元役人の社会と接近するために―とロシア領事は書いている―我々はクリスマスに様々なパーティーを開くことを思いつき、どうやら目的を達成したようだ。クリスマス・イブに、私の所では子どもたちのためにモミの木が立てられ、子どもたちだけでなくほとんど全ての役人がやって来て、役場の上級顧問官は知事〔ママ〕からの小さな贈り物を持ってきた……。我々のご婦人方はキャンディ、絵画、児童本を配り、特にロシアの民族衣装で日本人を驚かせた。新年も多くの日本人役人が我々の所で迎え、この時に仮面舞踏会を開き、クリッパー船「プラストゥン号」の士官たちが参加した。全ての踊りの名称を書いたものが日本人に見せられた。最後に１月１日の朝には地元の幼年学校生徒〔訳註 11〕が我々の元に寄越された。彼らの多くはすでに英語を学んでおり、祝祭後にはロシア語の授業を取り始めている」[13]

休息と食料補給のため箱館にロシア船が立ち寄り始めた。コルベット艦長 N. A. ビリリョフによると「上述の結果、コルベット艦「ポサードニク号」は…… 1861 年 2 月 10 日無事に箱館に到達した。私は船員の健康を回復するためにここで１週間過ごす必要があると考えた。そのうち 15 名は風邪をひいていた。箱館で我々はサウナ〔ママ〕を使い、おかげで長崎で梅毒を拾った５名を除き、

11）Lensen George A. *Report from Hokkaido: The Remains of Russian Culture in Northern Japan*. — Hakodate: The Municipal Library, 1954. — P. 76–78.

12）Plutschow Herbert E. *Historical Hakodate. Foreigners' Views of the City in the Second Half of the Nineteenth Century*. Hakodate: Hokkaido International Foundation, 1991. P. 49.

13）*Морской сборник*. — 1859. — Том XLIII. — № 9. С. 139.

病人たちは回復した。ここに停泊中、私は食料を調達し、青菜の漬物、塩漬け牛を積んだので、コルベット艦には4ヶ月分の航海食料がある。19日、私は錨を上げようと考えた」[14]

箱館最初のロシア正教会

ゴシケーヴィチが資金を提供し、直接参加して、1859年に箱館ロシア領事館附属のヴォスクレセニエ•フリストヴァ正教会が建設された〔訳註12〕。その聞き慣れない鐘の音に魅惑された地元住民の間で、教会は〝寺〟として有名だった。内装は、ビザンツ風のイコノスタスと床一面を覆う藁製のござである畳が溶け合い、まるで仏教寺院のようであった。

しかし当時は布教の話など全くなかった。ヴォスクレセンスカヤ教会の最初の司祭であるヴァシリー・マノフ輔祭はすでにいた正教徒のために勤行を行った。日本における真の布教活動は、1861年に病気のため退去したヴァシリー輔祭に代わってニコライ（カサートキン）神父が来訪した時にようやく始まる。ニコライ神父は実に卓越した人物だった。彼は異教徒の中でキリスト教伝道に生涯を捧げ、神の戒めを実行した。「さあ、行け、全ての民に教えを与え、父と子と聖霊の御名において洗礼を与えよ」（マタイ伝第28章第19節）カサートキンが日出づる国の歴史において果たした役割については、20世紀初頭の日本で最も有名な人物が〔明治〕天皇とニコライ主教の2人であったという事実が示している。ニコライはその驚異的な尽力により、日本人にロシアの文化、道徳、慣習、文学を教えた。数年間でニコライは日本語を習得し、伝道を行うことができた。彼の名は日本で50年以上にわたるロシア正教会の積極的な活動と結びついており、それなりの成果を収めた（ヨーロッパ諸国のカトリック、プロテスタント伝道団の成果には比べるべくもないが）。1868年、深く学んだ上で正教への改宗を希望した日本人3名が箱館で洗礼を受けた。これは町の主要神社の元神主であった沢辺琢磨、彼の友人で医師の酒井、浦野であった。彼らによって日本ロシア正教会の礎が築かれた。同年、信徒数は20人に達した。1870年ニコライ神父は掌院に格上げされ、日本におけるロシア正教伝道団の長となった。1871年、彼は必要不可欠な書籍を印刷するために外務省アジア局伝道団から贈られた石版印刷機と、善意の寄付金で購入した多数のキリスト教書籍、教会道具一式（教会建設の前提となる聖代案3つを含む）をロシアから運んで来た。教義問答学校の生徒の助けで、彼は自分の説教、祈祷書、その他の資料を印刷した。1872年には主要祈祷書、聖ドミートリー•ロストフスキーの正教宗教告白、愚者のための教義問答の、日本語書籍3冊が印刷された。ニコライ掌院が布教する抄訳聖書、マタイ伝、正教への改宗を希望する異教徒の宣告儀礼の印刷が準備された[15]。これは日本で最初の正教書籍であった。イコンも石版印刷により作成され、当時釧路、高崎、柳井原の教会の王門の上に見ることができた。なぜならニコライの不在時にこれらの道具を使って神学の勉強を行う必要があったからで、彼の生徒たち―沢辺琢磨、酒井篤礼、浦野大蔵―は教会スラブ語を独習するようになった。正教は函館〔訳註13〕から東北仙台まで広まり、仙台が中心地となった。しかし北の地方都市である函館に留まっていては、神父ニコライが伝道の成功を考えることはできなかった。そこで彼はまもなく、活動を広げるため東京に移った。1872年1月、函館の教会はキエフ神学アカデミー卒業生アナトリー神父の監督下に移された[16]。1872年7月、カム

14）*Морской сборник.* — 1861. —Том LIV. — № 7. — С. 50-51.

15）*Труды православных миссий Восточной Сибири. Том 2. 1868-1972.* — Иркутск, 1884. — С. 611.

16）アナトリー神父（チハイ•アレクサンドル•ドミートリエヴィチ））（1838-1893）はモルダヴィア生ま

チャツカ・クリル・アリューシャン主教ヴェニアミン猊下は視察目的で函館を訪れ、日本人たちの中の伝道事業組織と水準が非常に高いことに気づいた。聖母昇天祭の日、函館の領事館教会では彼らによる日本最初の主教祈祷式が行われた。主教が宗務院宛ての特別報告の中で記している行事の記載は興味深い。「函館の町にある正教会の内装の美しさは、カムチャツカ主教管区の中でブラゴヴェシチェンスク主教座教会に次いで最高である。教会は石の土台の上に築かれた木造建築で、町の最も高い場所にロシア・ビザンチン様式で建てられている。そのためまるで町全体を支配しているかのようで、遠くから見るとロシア正教の町のような外観を与えている。教会の中は、神の教会にふさわしい優雅さで作られており、軒や塔は金の玉縁で装飾され、イコノスタスには金めっきが施され、芸術的絵画のイコンで飾られ、リズニッツァ〔訳注 14〕は非常にすばらしい。日本人は扉の前で靴を脱がずに教会内に入ったりしないので、教会は常に清潔だ。函館教会がこのように整備されたのは主に掌院ニコライの監督のおかげであり、彼はそのために寄付を集めて全ての作業を監督したのみならず、彼自ら労働作業に参加した」[17]

掌院セルギーは 1890 年から日本正教伝道団で奉仕するために来訪し、次のように書いている。「函館は我々の教会の母である。ここで……ニコライ猊下は初めて日本の土を踏み、最初に我々キリスト教徒の洗礼が行われ、その後キリストの御言葉を日本中に伝えた」[18] 1907 年の火事の際、函館の正教会は炎に焼かれた。この時ニコライ神父は新教会建設の資金集めに取りかかった。「函館教会の資金集めを神はいつか助けて下さるだろうか？　今までに私の手紙とロシアにおけるセルギー猊下の寄付集めのおかげで、6000 ルーブルが集まった。だが少なくとも 3 万ルーブルは必要なのだ」[19] 教会は 1916 年に設計士河村伊蔵が設計した木造建築に代わり、六つの塔を持つ石造のロシア様式で再建され、同年にお清めが行われた。その美しい鐘の音から「がんがん寺」と呼ばれる。大鐘は 1907 年の火事の際に溶けてしまい、その代わりとなっていた 2 トンの鐘は 1928 年に東京の主教座教会（1923 年 9 月 1 日の関東大震災でひどく損傷した）に贈られた。三層のイコノスタスは 1910 年代にペテルブルクで作られた。教会には日本で最初のイコン画家山下りんの作品であるたくさんのイコンがあった。1983 年には国の重要文化財となった。

ロシア正教会の活発な宗教活動が首都に移った後も、函館における殿堂活動は続いた。猊下とセルギー神父が訪れたとき、ここにはキリスト教徒 300 人が残っていた。日本での教会建設以来、洗礼を受けたのは 1122 人であり、この頃までに実に 200 人以上がすでに他界し、800 人以上が北海道と日本の内地に散り散りになっていた[20]。旧領事館の建物はすでに空っぽになっていた。「領事用の

れ、キエフ神学アカデミー修了、修道司祭。日本には 1872 年より函館に、1878 年には大阪教区の責任者となった。布教には 1890 年まで従事した。1874 年、彼の招きで函館に兄弟のヤコフが訪れ、教会合唱団の指揮者兼日本正教伝道団の聖歌教師となり 30 年間奉仕した。著書：*Обитатели Японии.* — СПб., 1882; *Синтоистский обряд погребения у японцев.* — СПб., 1882. アナトリー神父の日記は雑誌 «*Миссионер*» 1878. – №№ 28–32, 1879. №№ 45–50. に掲載された。

17）*Труды православных миссий Восточной Сибири. Том 2. 1868–1972.* — Иркутск, 1884. — С. 608–609.

18）Архимандрит Сергий.　*По Японии (Записки миссионера).* — М.: Крутицкое Патриаршее Подворье, 1998. — С. 14.

19）Сост. К. Накамура. *Дневники святого Николая Японского.*/Т. 5. — СПб.: Гиперион, 2004. — С. 736.

20）Архимандрит Сергий... — С. 15.

非常に大きな建物、秘書官、司祭、医師などのためのいくつかの建物があった。隣には海軍のロシア診療所があった。しかし激しい火災でほとんど全ての建物が焼け落ち、残ったのは領事館の教会、司祭の家などだけだった……。全体的印象は、廃墟となった地主屋敷というところだ。母屋はすでになく、庭も荒れるにまかされ、建物には草が生い茂っていた。残っているのは低い離れと様々な建物だけであり、ひそやかに生活する者がいる様子は全く見られなかった。全てが過去の遺物である……」[21)]

函館におけるロシア人の人文活動

ゴシケーヴィチとニコライ神父は箱館にロシア語学校を開いた。亀田村では副業経営が組織された。ゴシケーヴィチは日本人に洋服の裁縫、パンの焼き方、乳製品・塩漬けの製造法を教えた。彼は有能な東洋学者であり、日本と日露関係の意義を深く理解した。

日本におけるロシア領事館活動の重要な側面となったのは、地元住民へのロシア語教育だった。日本人自身、19世紀初頭にこの方面に一歩を踏み始めた。当時「北方からの襲撃」がありうるとオランダ人に脅かされた将軍は、潜在的な敵を多面的に研究するよう命じた。その目的のためには、時々日本沿岸に放り出されたロシア人水夫を利用した。サハリン、クリル〔千島〕でロシア人と交流した経験のある日本人漁師も利用した。

箱館領事館が開かれるとともに、言語教育は新たな水準に上昇した。読み書き普及のために、教養とふさわしい才能のある人々が現れた。その始まりに大きく寄与したのがイヴァン・マホフであり、彼は初頭読本を作成した。これは小冊子(20頁)で、「日本の子どもたちへのロシア人役人の贈物。ロシアのアルファベット。ロシアノイロハ〔訳註15〕」と題された。読本は次のような呼びかけで始まっている。「親愛なる子どもたちへ！　このアルファベットを使って読み方、書き方、そしてロシア語の話し方を勉強しなさい」子ども向けであるが、教科書は大人にとっても役立った。学習者たちはこれでアルファベット（印刷体、筆記体）を知り、有声文字・無声文字、イントネーションについて理解した。完成された日常フレーズが示された。〝Сегодня весьма хорошая погода. 今日はとても良い天気だ。〟〝Вчера пришло сюда русское судно. 昨日ここにロシア船が来た。〟〝Завтра большой праздник. 明日は大きな祭日だ。〟〝Он ученик прилежный, а прилежание к наукам очень похвально. 彼は熱意のある生徒だ。学問への熱意は非常に賞賛に価する。〟などなど。ロシア語の発音は日本語のアルファベットである「片仮名」を使って伝えられた。この教科書にマホフは4ヶ月を費やした。教科書は木版画で増刷した。印刷されたのは500部で、函館、江戸、京都、長崎へ無料で配る予定だった。箱館知事〔ママ、奉行〕に贈った教科書は特に美しく装丁した。高官たちは贈物の美点を次のように評した。「すばらしい、実にすばらしい。きわめて興味深く、完璧に作られている。感服した！」1冊は幕府首班用とし、多色刷りの便せんに印刷した[22)]。

領事館の敷地では、教会誦経者V. L. サルトフが指導するロシア語クラスを組織した〔訳注16〕。その他、サルトフは函館の町の学校の一つで算数、地理、歴史を教えた。語学については、修道司祭ニコライとアナトリー神父が北海道を訪れた後に作られた伝導学校〔訳註17〕に参加した。1872

21) Там же. — С. 14-15.
22) Цит. По: Иванова Г. Д. *Русские в Японии. XIX— начала XX в.: несколько портретов.* — М.: Восточная литература, 1993. — С. 31.

年の日本伝導団結成報告によると、函館の正教伝道団はまだ日本人、キリスト教徒、異教徒にロシア語教育を行っている。日本人の教育は、ロシアの神学書で彼らにキリスト教の源流を見出させる、という宗教的方法で行われている。異教徒はロシア人との接触のために両親・役人に頼まれて勉強している。「現在（1872 年）函館では 6 人がロシア語を学んでいる。特にロシア語の上達が確実であるのはニコライ・マキポ、ピョートル・オオノ〔漢字不明〕のキリスト教徒 2 名である」[23]

正教伝道団の啓蒙活動の成果については、L. I. メーチニコフの回想記からも判断できるだろう。彼は 1873 年に日本に滞在し、次のように指摘した。「私は日本に来て、様々なヨーロッパ言語の日本人通訳が皆ほとんど最も控えめなレベルよりもさらに低い水準であるというのに、ロシア語通訳は比較的知識が豊富な点で群を抜いていることに非常に驚いた。しかも彼らは思った以上に数が多いのである。彼らのうち何人かは非常に若い時に国費やプチャーチン伯爵提督の支援金でロシアに派遣された。祖国を離れたことがない者でも、掌院アナトリー神父の指導の下、函館の我が国の伝道団が設立した学校で非常に満足にロシア語を話している」[24] ロシア語学習に重要な教科書は I. A. ゴシケーヴィチが作成した露和辞典である。

1865 年にロシアに帰還したゴシケーヴィチは、日本人の若者がサンクトペテルブルクの教育機関で教育を受けるために出発できるよう、尽力した。 6 人からなる最初の学生グループを、ゴシケーヴィチは 1867 年 7 月に退官するまで支援した。1873 年から、函館のロシア正教会はロシア語教育のため定期的に日本人子弟を受け入れた。1879 年にはここに 300 人以上の日本人子弟が学んでいた[25]。

ゴシケーヴィチとゼレンスキーはなかなかの写真家であり、数人の日本人にこれを教えた。彼らが教えた木津幸吉、田元研造は日本で最初の職業写真家の一人となり、自分の写真館を開いて日本に写真業を広く普及させた。

函館領事職でゴシケーヴィチの後任となったのが E. K. ビュツォフ（1837–1904 年；領事職は 1865 年から 1873 年 5 月 15 日まで務めた）であった。彼もまた著名な外交官であり、函館勤務の後に出世し、在清ロシア公使の職に任命された[26]。70 年代初めにロシア代理となったのは A. E. オラロフスキーで、後に在アメリカ合衆国領事、在シャム代理公使・弁理公使となった[27]。

23）*Труды православных миссий Восточной Сибири. Том 2. 1868–1972.* — Иркутск, 1884. — С. 610.

24）Там же.

25）Berton P., Langer P., Swearingew R. *Japanese Training and Research in the Russian Field.* — Los Angeles, Calif: Univ. of Southern California Press, 1956. — P. 18.

26）エヴゲニー・カルロヴィチ・ビュツォフ。1856 年より東シベリア総督府外務部の秘書官、1858 年中国との愛琿条約締結交渉に参加した。1858 年よりロシア内務省勤務。在天津領事〔訳註：日本語文献では在北京領事となっている〕（1862–1865 年）、在函館領事（1862–1865 年）、代理公使兼横浜総領事（1871 年 1 月 1 日–1873 年 5 月 15 日）1873–1883 年に在中国公使、1881 年に И. К.ギルスと共同で露中ペテルブルク条約に署名した。1883–1884 年退官。1884–1889 年在トルコロシア公使、1889–1897 年「スウェーデン・ノルウェー王室宮廷付」公使。

27）在函館ロシア領事館には次の人物が勤務した。在函館領事エヴゲニー・カルロヴィチ・ビュツォフ（1862–1865 年）、アレクサンドル・エピクテヴィチ・オラロフスキーは 1870–1875 年に在函館領事、カルル・イヴァノヴィチ・ヴェベル（1841–？）は 1871 年在函館副領事、グリゴリー・アレクサンドロヴィチ・デ・ボランは 1887–1888 年在函館領事、ミハイル・ミハイロヴィチ・ウスチノフは 1893 年在函館副領事、ジノヴィイ・ミハイロヴィチ・ポリャノフスキーは在函館副領事（1900 年）、マトヴェイ・マトヴェー

箱館のロシア人学者

北海道では、何人かのロシア人学者が調査を行った。その中で特に有名なのは植物学者でアカデミー会員の K. I. マクシモーヴィチ（1827–1891 年）であった。1853 年、彼はフリゲート艦「ディアナ号」で世界一周に出かけた。非常に苦労して当時はまだほとんど知られていなかったプリアムール地域の植物を調査し、豊富なコレクションを収集して〝Primitiae florae amurensis〟（“Mem. de l’Acad. Imp. de St.-Petersbourg”, 1859）のタイトルで出版した。1859 年マクシモーヴィチは新たにシベリアのイルクーツク、ザバイカリエ、松花江、ウスリーを経由して日本に行く旅に出かけた。1861 年 1 月には、日本に出発した。9 月 18 日に箱館に到着し、そこで 1 年以上暮した。当時島での調査旅行の半径は小さく、30 ヴェルストほどだった。こうした制限を日本政府が設けたのは外国人に対してだった。しかし植物学者〔マクシモーヴィチ〕はそれを喜んだ。そこではヨーロッパ人がまだ誰一人足を踏み入れていなかったのだ。ペテルブルクにもたらされた植物標本集により、植物学者たちは南東満洲里、日本の蝦夷ヶ島（北海道）という新たな地域を発見した。マクシモーヴィチは日本で借家を借り、そこで植物類の標本を保管した。彼は収集した資料を海経由でペテルブルクに送ることが可能だった。ロシアの外交官が援助して、日本における彼の滞在の安全を保護した。1861 年彼は長崎に移り、そこから日本の南部へ旅しようと試みた。この思いつきを実行すると、カルル•マクシモーヴィチは 1864 年 2 月ロシアに帰還した。彼は世界的学問のため、日本の植物 2000 種を発見した。ペテルブルクには 187 種の木の切片、植物標本集、植物 300 種の種、茶の潅木コレクションを持ち帰った。ペテルブルクの植物園はこのコレクションのおかげで世界的な植物学センターとなった。しかし理論の分野でもマクシモーヴィチは多くを成した。彼は日本が極東地帯全体と非常に異なっているという当時の見方を覆した。植物相から、日本は中国〔ママ〕や他のアジア諸国、シベリアとも共通点が多いと分かった。日本の植物の一部はまもなくロシアの土壌に根を下ろした。このようにして、ペテルブルク、モスクワの貴族庭園ではキンポウゲ科の日本のアネモネを栽培し始めた。ペテルブルクには日本のワスレグサが現われ、極東全体に広まった。

1865 年ロシアに帰国したゴシケーヴィチは祖国に膨大な量の日本史、日本文化、日本語関連書籍をもたらした。I. A. ゴシケーヴィチの蔵書はロシア科学アカデミー東洋学研究所（ペテルブルク支部）に保管されている。これは 1910 年に領事の子息 I. I. ゴシケーヴィチが購入した。その中には日本の木版画や古文献 1346 冊、地図 47 葉がある。収集された書物は外交官研究者の多様な関心を示しており、地理・民俗学・歴史・言語の問題にまで及んでいる。しかも日本人のことだけではなく、

ヴィチ・ゲデンストリョムは 1901–1905 年に在函館副領事、ヴィルゲルム・ヴィルゲルモヴィチ・トラウトショルドは 1906–1912 年に在函館副領事、エヴゲニー・フョドロヴィチ・レベジェフ（1879–192？年）は 1913–1925 年に副領事、アレクサンドル•セルゲーヴィチ•トロイツキー（1879–1940 年）は 1917 年（？）に在函館領事、アレクサンドル・ニコラエヴィチ・ロギノフは 1926–1928 年に在函館領事、ドミートリー・ドミーリエヴィチ・キセリョフは 1929–1930 年在函館領事、ニコライ・ニコラエヴィチ・ボリソフは 1929 年在函館 2 等書記官、モイセイ・イリイチ・スペクトルは 1929–1930 年に在函館領事館書記官、イズライル・カラスは 1933–1935 年に在函館領事、アレクサンドル・イトキンは 1933–1935 年に在函館領事。アレクサンドル・ニキーティンは 1936–1937 年に在函館領事（参照：Lensen George A. *Russian Diplomatic and Consular Officials in East Asia.　A Monumenta Nipponica Monograph.* — Tokyo: Sophia University, 1968.）

隣接諸国である中国、朝鮮の民族にまで関係している。I. A. ゴシケーヴィチがペテルブルクにもたらした資料は最初で最大の日本文献コレクションとなり、アジア博物館（東洋学研究所の前身）に所蔵された。それらは科学アカデミーで日本文化が正規に研究され始める前にもたらされた。

経済関係育成の試み

上記の時期に、日本はロシア商品の市場とはならなかった。この国からの輸入品は多くはなかった。日本に領事団を派遣する際に、日本人がロシア人から多くの物を購入するだろうと予想されたにもかかわらず、当時はまだロシアが日本人から購入する物が明確になっていなかった。このような不明確さにもかかわらず、当時はまず第一歩を踏み出さなければならず、商品交換の経済的必要性が当然両国の貿易を発展させるだろうという固い確信があった。1857 年の『イルクーツク報知』は「今年の夏アムール湾にわが国との貿易を試みるため日本から最初の船が訪れる。日本人は我々に干果物、青菜、サラセン黍〔＝米、訳注 18〕、木製品・象牙製品をもたらすはずである」[28] と伝えている。それがどのようなものであれ、プチャーチンの条約締結以来、日本との貿易が始まると、シベリア商人は「この貿易に大きな期待と希望をかけた」[29] しかし期待は証明されなかった。50 年代、60 年代末、貿易の伸びは非常に弱かった。1879 年日露貿易の総額は 6 万円以下、このうち日本に輸出された商品の額は 5 万円だった。ロシア人は日本の石炭、木炭、魚、膠、豆、じゃがいも、食料品、酒、塩、硫黄、茶、木材、煙草、鼈甲製品、麺、いくつかの免税商品、例えば織物、陶器、小麦粉、神、うるし製品を購入した。

北海道では、ロシア人の作家・旅行家 S. V. マクシーモフが書いたように、「ここで最初で最後のロシア人顧客は軍艦の士官、水夫だ。しかしそれさえも期待はずれだ（箱館がロシア人の金で回復するだろうと言われようともだ）。水夫たちは安い米の蒸留酒であるサケを好み、ズボンに半絹の生地を使用することを思いついた。士官たちもまたここで非常に安い絹織物や、小箱・大箱の類の漆製品を購入している。正規のきちんとした商売は、ここで安価に手に入る他の商品を見出し、もちろんそれを入手している。なぜなら人々は新しいものを喜ぶからだ」[30] 日本人はロシアで毛皮、ガラス・金属製品、若干の食料品、塩漬けの魚、木材、煙草、免税の粉類を少量購入した[31]。ロシア商品は類似のアメリカ商品、ヨーロッパ商品よりも運搬費用が非常に高くついた。ロシア商人は日本に商品を送る際に、まず陸路でスレーチェンスクに届け、その後それらをニコラエフスクに浮送しなければならなかった。その先のルートに関しては、ロシア商人は日本に送る手立てがなかった。このような浮送に適したロシア船はなかった。シベリアから日本への商品輸送には 1 年半から時には 2 年を要した。その上日本人はシベリア、極東に豊富な毛皮や木材にあまり関心を持たなかった。ヨーロッパ人、アメリカ人は当時日本人にシェルティング〔訳註 19〕、サージ、羊毛製品、ラシャ、錫、ブリキ、鉄などを売りさばくことに成功し、それらは当時シベリアで全く供給できない商品だった。その上、当時日本に存在した外貨交換の法律のおかげでルーブルは価値を失い、貿易はロシア商人にとって利益がなくなった。

28）Цит. По: Новаковский С. И. *Япония и Россия.* — Токио, 1918. — С. 205.
29）Там же.
30）*Морской сборник.* 1863. — Том LXIX. — № 12. — С. 359.
31）Plutschow Herbert E. *Op. Cit.* - P. 101.

箱館貿易の明確な展望はサハリンの石炭であった。そこに石炭備蓄倉庫を作る必要があることは明白だった。ロシア外務省は1858年、すでに在日本領事に対し、「箱館に石炭備蓄倉庫を築くため、土地の割譲について政府と接触するよう」委任した[32]。世界周航ルートによりもたらされるイギリスの石炭はあまりにも高価であり、日本の石炭はあまりにも品質が悪かった。このためサハリンの石炭が太平洋水域で広く売れる可能性が出て来たのである。1862年、1863年、大量の石炭余剰を念頭に置いて、政府は在中国・日本のロシア領事に対し、サハリン石炭の買い手を捜すよう委任し、そのうえ価格を積載量1トン当たり7ルーブル、3ドル75にまで引き下げた。1866年在箱館ロシア領事で五等官のフォン・ビュツォフは、箱館で石炭貯蔵庫を建設する必要性を主張した[33]。

ヨーロッパ、アメリカの企業家と比較して、ロシアの企業家たちは日本で積極的ではなかった。それでも進取の気性があるロシア人もいて、1863年に箱館の大町区にロシア・ホテルを開いた。この人物はシェレメチェフ伯爵の召使で、ピョートル・アレクセーエフである。アレクセーエフが亡くなった時、彼のドイツ人妻ソフィヤ・アブラモヴナがしばらくホテルを切りもりしていた。70年代初め、ロシア人の生活の中心はニコラエフスク市からウラジオストクに移った。函館は以前の意味を失い、当然ホテルは閉鎖になった[34]。日本で最初のロシア・レストランはまさに箱館に出現した（ロシア・ホテル）。日本人の開いた最初のロシア・レストランが函館の「五島軒」であることは皆に認められている。このレストランの料理人は長崎の五島列島出身の英吉と言われている。（彼は1868年の日本の内戦である「戊辰戦争」の直後、ロシア領事館の厨房に入り、そこでロシア料理を学んだという伝説がある）[35]

新技術も主に北米や西ヨーロッパから日本に入ってきた。当時の日露貿易の最大品目は函館に停泊するロシア軍艦団用の各種食料品であった。

日本側資料によると、日露の貿易高は1878年に対ロシア輸出が90,584円、ロシアからの輸入が9,228円であった。20年間でこれはそれぞれ2,642,575円、1,810,461円に増えた[36]。

日露貿易は60年代末までに徐々に増加した。ロシア船はますます頻繁に日本沿岸に来るようになった。M. ヴェニュコフの計算によると、1869年に日本の開かれた港にはロシア船34隻が停泊し、そのうち函館は7隻だった（比較すると、イギリス船は814隻で、そのうち函館は71隻だった）[37] このように、当時の日露関係の主要分野は文化的接触であり、将来に期待しようとする相互認識があった。

---

32) Панов А. А. *Сахалин как колония. Очерки колонизации и современного положения Сахалина.* — М., 1905. — С. 22.
33) Там же.
34) *Дальневосточная звезда.* — 1910. — № 3. — С. 4.
35) См.: http://www.russia-japan.nm.ru/nakamura_03.htm
36) *Returns of the Foreign Trade of the Empire of Japan for the Fourty Six Years from 1868 to 1913 inclusive.* — Tokyo, 1913. — P. 27-33.
37) Новаковский С. И. Указ. Соч. — С. 208.

函館のロシア人墓地

1867 年、江戸で追加の日露修好通商航海条約が締結され、新領事に E. K. ビュツォフが任命された。ロシア人外交官が東京に居を構えると、軍艦、商船は主に長崎を拠点とするようになり、函館の町は日露関係の独占的立場を失った。ロシアとロシア人を偲ばせるものは地元教会の正教徒と小さなロシア人墓地だけとなった。水兵 25 人、ロシア領事館医師 V. C. ヴェストリ、誦経者 V. L. サルトフを含むロシア帝国臣民は、そこに最後の安らぎの場所を見出した。1877 年、ここに日本人キリスト教徒数名、大館出身のヤナカ・アレクセイ、サイトウ・モサク（イサイヤ）、鈴木モリサク、イシダ・イジマ〔漢字不明〕も埋葬されている。後にここには多くのロシア人移民が埋葬された。函館墓地に埋葬されたロシア人水夫のリストは V. グザノフの本に引用されている[38]。しかしこれには不正確なところがあり、再度函館墓地を訪れ、グザノフのデータと著名な日本人考古学者馬場脩の本を比較し、特定することができた[39]。ここには初代ロシア領事の妻エリザヴェータ•ステパノヴナ・ゴシケーヴィチが埋葬されたと誤って考えられている[40]。E. S. ゴシケーヴィチは箱館のロシアホテル事務所で働いていた。1864 年頃、彼女は重い病になり、まもなく亡くなった。I. A. ゴシケーヴィチの希望で、彼女は領事館の隣、おそらくは旧ロシア教会（元町地区）に埋葬された。1907 年の火事の後、墓は失われた。彼女の遺骨は 1916 年の新教会建設時に発見された[41]。

函館のロシア人墓地

1．ヴラディーミル・ステパノヴィチ・ヴェストリ、1869 年 1 月 1 日死亡、ロシア領事館医師、29 歳。
2．ヴィサリオン•ルヴォヴィチ•サルトフ、1874 年 1 月 17 日死亡、ロシア領事館附属教会誦経者、36 歳。

水　夫

3．リュドヴィク・シャチコフスキーは 1863 年 7 月 20 日に溺死。ロシア領事館付信号水兵。
　・コルヴェット艦「カレワラ号」
4．アフトノム・シャムネフ、1862 年 8 月 16 日、28 歳、第 28 艦隊兵団機関兵。
　・スクリュー・クリッパー船「ガイダマク号」
5．アンドレイ・ヴァシリエフ、1861 年 9 月 28 日、兵団帆船乗組員、27 歳。
6．ステパン・アレクセーエフ、1864 年 1 月 29 日、第 19 艦隊兵団下士官、44 歳。
　・コルヴェット艦「ポサドニク号」
7．ステパン・ゴムジコフ、1862 年 3 月 18 日溺死、水兵、28 歳
8．アンドレイ・ポポフ、1862 年 3 月 18 日、海軍士官候補生、26 歳。
9．ニキータ・クジミン、1861 年 10 月 15 日、第 28 艦隊兵団兵曹長。32 歳。
10．ヴァシーリー・メスミコフ、1861 年 10 月 16 日、水兵、30 歳。

38）Гузанов В. *И праху близких поклониться. Русские воинские кладбища в Японии. Историческая хроника.* — М.: Япония сегодня, 2000. — С. 29–30.
39）馬場脩『函館外人墓地』函館、1975 年。
40）Гузанов В. Указ. Соч. — С. 30.
41）馬場脩、前掲書 — P. 81.

11. イヴァン・クズネツォフ、1862年8月27日、第28艦隊兵団水兵、32歳。
12. エヴトロピー・グヴォズジェフ、1862年3月9日、第28艦隊兵団の水夫。26歳。
13. フョードル・ステパノフ、1862年2月17日、第28艦隊兵団水兵。28歳。
    ・スクリュー・コルヴェット艦「アブレク号」
14. プロコピー・シネパエフ、1862年6月30日、第28艦隊師団准医師。30歳。
15. ダヴィド・ユヴォニン。1862年6月28日、水兵、26歳。
16. 名前なし、1862年、第28艦隊兵団機関長。
    ・スクーナー船「ペルヴァヤ号」
17. フィリップ・パグディン。1863年10月27日。第27艦隊兵団水兵。33歳。
    ・スクリュー輸送船「マンジュール号」
18. プロコピー・フィリッポフ。1862年11月19日、第27艦隊兵団操舵手。26歳。
    ・コルヴェット艦「ルィンダ号」
19. グリゴリー・マホフ。1862年10月8日、第28艦隊兵団水兵、26歳。
20. エヴドキム・スミルノフ、1863年8月6日、第4作業兵団船匠員、29歳。
    ・スクリュー・コルヴェット艦「ボガトィル号」
21. イヴァン・トパノフ。1869年8月27日、第28艦隊兵団水兵。29歳。.
    ・スクリュー・コルヴェット艦「ノヴィユ号」
22. カジミール・ニェパゴーダ、1863年8月16日、第26艦隊兵団水兵、26歳。
    ・スクリュー・クリッパー船「ジギト号」
23. ピョートル・エフセーエフ、1859年11月1日、第28艦隊兵団機関兵、26歳。
    ・スクリュー・コルヴェット艦「アスコルド号」
24. マチス・ヴェクマン、1866年6月5日、水夫、31歳。
25. グリゴリー・ポウルケヴィチ、1859年6月26日、補給係。
    ・スクリュー輸送船「ヤポーネツ号」
26. ステファン・ギリショフ、1860年1月25日、第8艦隊兵団水兵、30歳。
    ・河川砲艦「マリャク号」
27. ピョートル・ストゴフ、1866年11月8日、アムール艦隊兵団海軍少尉、24歳。

移　民

28. プロコピー・ペトローヴィチ・バトゥーリン（1880年7月-1939年8月）企業家、上海で死亡。
29. リュドミーラ・チェリー（28.08.1914-13.06.1939）П. П. バトゥーリン養女、上海で殺害される。
30. コスマ・ロディオノヴィチ・ズヴェレフ（18.10.1886-7.01.1944）大尉、移民、ペルミ県クングル市出身。スパイ容疑により旭川刑務所に投獄、同所で死亡。
31. ヴァシーリー・ヴァシリエヴィチ・アルハンゲリスキー、二等大尉、移民（1886-25.03.1939）
32. クセニヤ・アルハンゲリスカヤ（1921-12.01.1943）
33. クセニヤ・ニコラエヴナ・アルハンゲリスカヤ（1881-08.01.1943）。

42）『函館とロシアの交流』函館、2004年、p.17.
43）参照：http://www.russia-japan.nm.ru/nakamura_03.htm

ロシア人ディアスポラに関するわずかな痕跡

1917 年以後、函館にはわずかなロシア人とその子孫が住んでいた。1924 年、ここにロシア人移民 110 人が、1925 年にはさらに 158 人が到着した[42]。著名な日露関係の専門家、中村喜和教授は、函館でロシア人商人がラシャを扱っていた事実を引用しており、1924 年には約 50 人であった[43]。1933 年以前、函館には「リューリ」商会（1902 年ニコラエフスク・ナ・アムーレ創業）の支部があり、ピョートル・ニコラエヴィチ・島田〔訳注 20〕の会社と共同で漁業や商売を行っていた。1908 年から函館では「デンビー商会」が事業を行っており、ウラジオストク・デンビー商会の支店であった。同商会は水産業を行い、毛皮を商い、ロシア義勇艦隊の代理店であった。商会の設立者ジョージ・デンビーはショットランドの出身であった。その後彼はロシア国籍を取得する。19 世紀末 20 世紀初頭、アルフレッド・デンビー（デンビー一族の 2 代目）はカムチャツカ地区に漁業区域を持っていた。彼は鮭類の加工工場も持っていた。革命後のロシアでデンビーは漁業権を失い、毛皮取引業を行った。1935 年、彼は在函館イギリス領事館の名誉領事に任命された。彼の住居は函館西部の谷地頭地区にあった。デンビー宅があった坂を函館住民は「デンビー坂」と呼んだ[44]。函館にはロシア人移民 D. N. シュヴェーツの毛皮商会があり、1930 年に竣工した。シュヴェーツ自身は 1934 年に亡くなり、函館に埋葬された。1936 年シュヴェーツ一家は函館を去り、後にこの建物を K. レイモンが手に入れた。

日露関係を結びつける結節点としての函館の役割ははるか往時となってしまったが、町では今も多くのものが往時を偲ばせている。港ではロシア国旗を掲げた船が見られ、正教会の鐘の音が鳴り響いて少数の信徒を勤行に呼んでいる。

＊　　＊　　＊

ロシアの日露関係史学において、函館のロシア人たちの外交史・実務史・文化史や宗教活動に関する詳細な記述を見つけることは恐らくないだろう。19 世紀にすでにそのことに言及されることが非常に多かったにもかかわらず、である。不幸なことに、著者たちは互いに同じ内容を繰り返しただけであった。その中にはロシア人の旅行家、多くの作家兼出版者、司祭、水夫がいた。後に外交代表機関が江戸に移ると、北海道は重要性を失った。

それと同時に、この問題は大きな関心を与えるものである。なぜならとりわけ北海道、函館において日露関係は組織的性質を持つようになったからである。ここには日本で最初のロシア領事館とロシア教会、司祭たちが言うところの「日本のロシア教会の母」があった。ここでは日本とその住民、実態に関して、初めてロシア人の深い知識が形成されていった。日本の南部よりも北部の地理的環境そのものが、ロシア人にとってはより身近で理解しやすいものだったということもあるかもしれない。

北海道とロシア沿岸が領域的に近いことが、両国の実務活動、とりわけ貿易の発展に対する確固たる期待をロシア人企業家に抱かせた。しかし当時はまだそのための経済的条件がなかった。

44）清水恵『函館・ロシア　その交流の軌跡』函館、2005 年、p.139

カトリック教会が日本の南部地域から入ってきたとすると、ロシア正教会は日本の北部地域にやってきた。ここで初めて日本人が正教に改宗し、日本で初めて正教の伝道が鳴り響いた。北海道における正教の普及（もちろんカトリックほど成功したわけではないが）は、両国民の異文化交流の断面と見なすことができるだろう。

このように、箱館時代は日露関係史の最初の一ページでありながら、ロシア史学の中で十分研究されていないだけでなく、むしろ不当に忘れ去られていると言えるのである。

訳註

・本文中では「箱館」と「函館」を併記した。箱館は 1869 年に「函館」と改称されたためであるが、歴史上の正確な表記を考慮し、時系列に従って使い分けた。
・本文中のロシア人名のイニシャルは全てラテン・アルファベットで表記した。

1）原文では時代区分をせずに北海道としているが、この時代は蝦夷地と呼ばれていた。蝦夷地が北海道に改称されるのは 1869 年（明治 2 年）である。
2）以下は旧ロシア暦
3）１クール＝146.7 kg
4）この日付は日本の旧暦に従っている。
5）前の日付は旧ロシア暦、() 内は西暦による日付。
6）旧ロシア暦の日付。
7）前の日付は旧ロシア暦、() 内は西暦による日付。
8）この知事とは、当時の箱館奉行、村垣淡路守範正のことを指していると思われる。
9）疥癬（かいせん）とは、疥癬虫の寄生により発生する皮膚病の一種。幕末に日本を訪れた外国人は、共通して日本人に疥癬が多いと記述している。日本人には毎日風呂に入る習慣があったにもかかわらず、疥癬が蔓延していたことは外国人にとって驚きであった。
10）当初箱館奉行は外国人に対して寛容な態度をとっていたが、安政 6 年（1859 年）末、幕府から日本人に外国人医師の治療を受けさせないよう指示された。しかし日本人医師が外国人医師から師事を受けることは許可したため、日本人医師がアルブレヒトの元に押しかけた。：『函館市史』通説編第 2 巻、pp. 1366–P 1367（http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/soumu/hensan/hakodateshishi/tsuusetsu_02/shishi_04-12/shishi_04-12-01-01-01.htm）
11）引用史料ではカデット кадеты と記述されているが、地元武士の子弟のことと思われる。
12）現在のハリストス正教会。「ヴォスクレセニエ•フリストヴァ」とは「救世主復活」のことであり、直訳名称は「救世主復活教会」である。
13）箱館は 1869 年に「函館」と改称されており、以下 1869 年以後の出来事については「函館」と表記する。
14）祭服・聖器物保管室の名称。
15）最後の「ロシアのイロハ」の部分はロシア語アルファベットのまま日本語の発音で表記されている。
16）サルトフが日本からロシア語学校教師に採用されたのは 1873 年（明治 6 年）のことである。
17）原文では〝デプギョ　ガッコ Депгё Гакко〟となっており、ロシア語のアルファベット〝エヌ н〟が、誤って〝ペー п〟と印刷された可能性がある。デンギョー　ガッコとすると、伝行学校、もしくは伝業学校などの表記が考えられるが、ここでは正教会伝道団の学校と考えて伝道学校とした。
18）サラセン黍（ソロチンスコエ•プシェノー Сорочинское пшено）とは、米のこと。ロシア語のソロチ

ン сорочин はサラツィン сарацин ともいい、サラセン人を指す名称である。かつて米はイスラム圏を通じてロシアに輸入されていたため、このような名称で呼ばれるようになったのであろう。

19）麻地織の多様な綿製品のこと。

20）日本名：島田元太郎

Russians in Hokkaido

Sergey KUZNETSOV

Historical faculty, Irkutsk State University, Russia.
Graduate school of Letters, Hokkaido University (Guest professor)

It is hardly possible to find the detailed description of history of diplomatic, business, cultural or religious activity of Russian people in the Russian historiography of the Russian-Japanese relations to Hokkaido, though mentions of it in 19th century were more than enough. The trouble is that the authors in their majority only repeat one another. There were also Russian travellers, many writers and publicists, clerics and seamen among them. Later, when diplomatic representatives have got over in Edo, Hokkaido has left on the second plan.

At the same time this subject represents the big interest, as at Hokkaido, in Hakodate the relationship between Russia and Japan began to get regular character. There was a first Russian consulate in Japan here and, also, the first Russian church - 《mother of Russian churches in Japan》, as priests say. The first deep impressions of Russian about Japan, its inhabitants and realities were also made here. Probably, the environment of Japan's North was more close and clear to the Russian, than it's South.

The territorial affinity of Hokkaido to the Russian coast gave Russian businessmen the certain hopes for development of bilateral business activities, first of all - trade. However, at that time there were no necessary economic conditions for this purpose yet.

If the Catholic church had come to Japan from the South, Russian orthodox mission arrived from the North. Russian priests christened the first Japanese here, the orthodox sermon sounded for the first time in Japan also. Distribution of Orthodoxy to Hokkaido (certainly not such successful as a Catholicism) can be considered as the certain mark at intercultural dialogue between two peoples - Japanese and Russian.

Thus, it is possible to tell, that Hakodate's period - one of the first pages in history of the Russian-Japanese relations, not only insufficiently studied in Russian historiography, but more likely - evidently forgotten.